



# ピッポ新聞

2004

5

No. 187

## 子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

# ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL &amp; FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>Email [pippo@diana.dti.ne.jp](mailto:pippo@diana.dti.ne.jp)

## 大型絵本について考えてみる

(その2)

本屋というものの役割を考えて見ました。本屋は出版社が出版した本を直接読者に手渡すのが仕事です。そこでは、時には、読者に新刊や品切れ本の情報の提供をしたり、本の紹介や説明をしたりと、ある場合には出版社の代弁者として読者に対しています。また時には、逆に読者の立場に立って、意見や批判、喜びといったことを出版社に伝えるのも大きな仕事だと考えます。寄せられた意見を出版社は参考にして、よりよい本の出版を目指すのだと認識しているのです。

特に、子どもの本の専門店という性格上、読者(お客さん)との交流という点では一般書店よりも強いものがあると思います。店主などは、面白い本と出会ったときなどは、この本をあなたに紹介したらきつと喜んでくれるに違いないなどと、具体的に子どもの顔さえ浮かんでくるのです。

ところで、先月号(4月号)のピッポ新聞で「大形絵本について」ぼくの意見をまじえながら、これを出版している理由などを福音館書店の編集部長宛てに質問したのです。(大型絵本は福音館だけでなく、偕成社などからも出されていることは承知していますが、一番冊数が多いし、ぼく自身はより期待を裏切られたということ、福音館に質問を出しました)

そこで、4月号の「ピッポ新聞」を販売課の担

当者宛に送ったのです。編集部長直接とも考えたのですが、それでは失礼なのではないかと思いい、ピッポと福音館の正式な窓口は販売課であることを考えて、販売課担当者に送付いたしました。

ところが、現在まで(5月13日)のところ、福音館からの回答は無しがつぶてです。そこで、冒頭のもつて回った言い方になった次第です。

大福音館の編集部長には、「ごまめの歯ぎしり」程度にしかなじられないのかも知れませんが、ちつばけな子どもの本専門店の後ろにも読者が控えていることをお考えいただけませんかでしょうか。

それに、この機会をとらえて、福音館のお考えを明らかにすることは宣伝的な意味でも大きいのではないのでしょうか。正直のところ、福音館に大いなるシンパシーを抱いているべくとしては、本当に「大型絵本」に対する福音館のお考えを聞きたいのです。ご回答を心待ちにいたしております。

ちなみに申し添えておきますが、このピッポ新聞は毎月300部を発行しております。それと、2002年1月号からは、ピッポのホームページ上にWeb版「ピッポ新聞」をアップロードしています(バックナンバーを含めてここでご覧いただくこともできます)から、こちらをご覧になっている方もいらっしゃると思います。それにしてもささやかな媒体ではありますが……。

さて、今号では「大型絵本」や「読み聞かせ」について、お寄せいただいた読者の「意見を紹

介いたします。最初は千葉県のKさんからのご意見です。

新聞に載っていた「大型絵本」について、考えさせられました。実は、子どもに通っている幼稚園にも福音館の大型絵本があるのです。

実際に子どもたちにその絵本で読み聞かせをしているところも見ています。ところが、「大きな絵本だと、後ろの子たちもよく見えていいな」などと単純に考えていました。でも、今回、あらためて考えて見ると・・・？

私人としては、読み聞かせというのは、単に子どもたちに絵本を読んでやるということだけでなく、読み手と聞き手が一体となる感覚を大事にしたいと思っています。ですので、基本的には、親子や少人数のグループで、聞き手は、読み手の声の感じや表情を、読み手は、聞き手を身近に感じながら読むこと読み聞かせだと思えます。とすると、やはり大人数でも見やすい大型絵本は、？？？ですね。

ぜひ、大型絵本の出版を承諾した作家の方々のご意見を伺ってみたいです。ただらだと長くなってしまう、申し訳ありませんでした。それでは、このたびは本当にありがとうございます！今後ともどうぞよろしくお願い致します。

Kさんは日頃「読み聞かせ」をおやりになっているご自分の体験から、子どもたち

の関わりが大切だというご意見です。北海道のMさんからもご自分の「読み聞かせ」体験をお寄せいただきました。

私は、娘と息子の通っている小学校の開放図書館でボランティアをさせていただいております。開館当時からお世話になり、この秋で5年目になります。

いろいろな班があるのですが、私は読み聞かせ班に所属しております。朝の読書の時間(8時<sup>35</sup>～50分の15分間ですが)に教室に入って本を読んだり、週に一度「お話広場」といって絵本の部屋で放課後に本を読んだり、そんな活動に携わっております。

大型絵本ですが、その小学校にもあります。3冊くらいでしょうか、私も驚いてページをめくった事があります。それは貸し出し禁止になっており、見たい人はその場で見ることになってます。(そうですね、あんな大きな本はとてもち歩きにくいと思いますから！)

初めはモノ珍しさで見ている子がいたと思いますが、今では？見かけません。読み聞かせに使ったという情報も今のところ聞いてません。

と、大型絵本についてはこのくらいしかわかりませんが、大型紙芝居なら製作で何度かお手伝いした事があります。

「周年行事」とか「学校のお祭り」とかイベント用です。『スーホーの白い馬』の紙芝居も作りました。体育館で全校生徒(厳密には2回に分けたので、3

つの学年ですが)に見せました。

その時のイベントですが、馬頭琴・のどたで有名な嵯峨治彦さんに来ていただき、演奏・公演をしていただいたり、体育館の一部にモンゴルの遊牧民が住んでいる移動式の家ゲルを建てて(実物です。かなり大きいです。建てるにあたってはお父さん数名にもお願いしたと記憶しております)、子供たちに体験してもらったり、そのイベントの一環で大型紙芝居をしました。

スーホーが白馬に乗って駆けていく開きの場面は本と同じく2ページ(紙を2枚)で作りました。絵の得意な方がいます、色を塗るのが得意な方もいます。でも、本とまったく同じというわけにはいきません。が、とても上手にできたと思います。

先ほど申しましたが、こうなると「読み聞かせ」と言うより全くのイベント用ですね。近隣の学校の開放図書館でもボランティアの方々が大型紙芝居を作っているところがあり(学校間で貸し出しできるように、リストがあります)、去年の「学校のお祭り」では、『おおかみのごちそう』の大型紙芝居を借りてきて、披露しました。ただ、こういうのは「この機会を通して、本に慣れ親しんでくれる子が一人でも増えてほしい」という願いがあるのだと思います。イベントは一度だけですが、それをきっかけにそのお話をもう一度読みたい・見たいと思っただ子はその本を手にしてくれることを願っ

ているのだと思います。

大きくして、その本の「作家の思い」が伝わるかという疑問は 私も同じくあります。その本には その本にちょうど良い大きさがあり、それがやはりベストだと思えます。間が抜けてしまつては台無しですもんね。

この秋に5周年記念行事があります。それに向け、この地区の「歴史」を、絵本が大型紙芝居にしよう という計画があります。もうすでにお年寄りの方々からお話をきいて まとめてくださつていられる方がいます。

小学生は、今自分が住んでいるココが、昔どんなふうだったか知らない子が多いです。授業の総合学習の一環としても使えるように と学校側からも依頼があつたそうです。私もお手伝いとして、また参加させていただくつもりです。

Mさんたちはイベント用に大型の紙芝居を作つて、おおいに役立てているようですね。ぼくの知り合いも20年もまえから「ぐりとぐら」の大型絵本を手作りして、あちらこちらで、「読み聞かせ」をしていました。読者がどんな形でその絵本を楽しもうか、かまわないと思えます。

ぼくが問題にしたのは、版元が「大型絵本」を出版するに当たつて、そこで、絵本というものに対して、どういふ議論がなされたかということなのです。

既に絵本として評価されているものを「読み聞かせ」ブームだからといって、安

易に売り出したのではないかという疑問を抱かざるをえないのです。

こういう姿勢はある意味で、読者を軽んじることに繋がると考えます。

さて、KさんもMさんも、そしてぼくも知りたいし、疑問に思うことは、著作権者である作者の人たちが、この「大型絵本」の出版にどうして同意したかということだと思います。作者の方たちのお考えも是非お聞きしたいことではあります。

重ねて書きますが、福音館書店編集部長さま、回答を心待ちにしております。

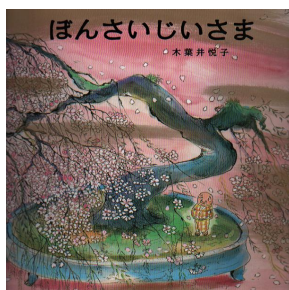
「大型絵本」についての、みなさんのご意見をお考えをまだまだお待ちしております。どうぞお寄せください。これを切つ掛けに絵本についての紙上討論ができればとも考えております。(ピッポ店主)

## ねー、この本読んだ？

『ぼんさいじいさま』(木葉井悦子・作 1680円 ビリケン出版)

この絵本は1984年に偕成社から出版

されて、品切れになつていたのですが、今回復刊されました。似たような内容の絵本にスーザン・バーレーの



「わすれられないおくりもの」(1050円 評論社)があります。ぼくは、あの絵本はなんだか上から「こうなんですよ」と子どもに説教しているようで、余り好きではないのですが、こちらは土着的な感じで、生き物に対しても作者の姿勢が自然な感じがいいです。

『おばけドライブ』(スズキコージ・作 1680円 ビリケン出版)

これは2刷りとあり、出版されたのは去年ですが、今年初めて読みました。コー



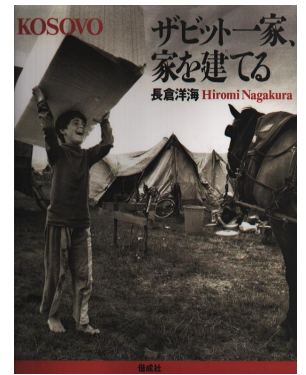
ジさんの絵は、ひとめみれば、コージさんつてかんじで、独特な世界を

描いていますね。絵本全体から、リズムや踊りがあふれ出してきました。「・・・をものともせず」と続いているのがとてもいい！ハイザ君は憧れている世界を夢見たのですね。登場してくる車は何か霊枢車のイメージですが、コージさんは霊枢車が好きなのかな？

『ザビット一家、家を建てる KOSOV』(長倉洋海・作 1890円 偕成社)

長倉洋海の新しい写真集 3年半振りのコソボ、ザビット一家がどんな暮らしをしているか訪ねた写真家は、子どもたちの成長した様子を写真で綴る。その一家を通





して、民族紛争から5年経ったコソボの人びとの暮らしが見えてくる。戦争が終わった人びとは、貧しい生活ではあるが、希望を胸に抱いて暮らしている。なかでも、子どもたちの笑いや、仕事をてつだったり、イタズラしたりする様子が生き生きとして伝わってくる。イラクの人びとも一日も早くこのような暮らしができるようになることを願う。

## インフォメーション

5月22日(土) 『ばあやのお話か』

久しぶりの「おはなし」の会です。午後2時からピッポでやりますからようこそー

7月17日(土) 『さとうち監さんをついて』という会を計画しました！

「冒険図鑑」「園芸図鑑」の著者・さとうち監さんが8月号の「たくさんのふしぎ」で「種採り物語」を新たに出します。そこで、静岡に来ていただいて、「野菜の種」を自分で採って育てていく面白い話や、岩手の山の家での暮らし、そこでの庭作りや、自然の生き物たちとの交流などの話をしていただけたら

と考えました。できたらお茶など飲みながら、楽しい時間を過ごせたらと考えています。会場はまだ決まっています。次号でお知らせいたします。なお、さとちさんからのメールによると、岩手の家では現在アカゲラが屋根裏の壁に三個目の穴を空けて住んでいるとか・・・

岩波の復刊！ 6月22日予定

大図解 九龍城	寺澤一美・写真文 可児弘明・絵	1997年 初版 31
九龍城探検隊		50円
ピラミッド	デビッド・マコー レイ・作 鈴木八 司・訳	1979年 初版 24 15円
カテドラル	デビッド・マコー レイ・作	1979年 2625円
都市	デビッド・マコー レイ・作	1980年 初版 28 35円
キャッスル	デビッド・マコー レイ・作	1980年 初版 26 25円
アンダーグラウンド	デビッド・マコー レイ・作	1981年 初版 28 35円

岩波書店から『てのひらむかしばなし』出版！ 第一回は7月15日発売 (各798円)

ももたろう	はたこしろう・絵	七月発売
かちかちやま	ささめやゆき・絵	七月発売
したきりすずめ	ましませつこ・絵	七月発売
うろこだま	下田昌克・絵	七月発売
へっこきあねさま	荒井良二・絵	九月発売
やまんばのにしき	沼野正子・絵	九月発売
つるのおんがえし	ながさわまさこ・絵	十月
さばつりどん	伊藤秀男・絵	十月
十二支のはじまり	山口マオ・絵	十一月
だんだんのみ	福知伸夫・絵	十一月

## 編集後記

さて、今月号の「大型絵本」の記事の内容について少し説明をさせていただきます。というのは、これを書き始めた時点では、福音館編集部からは、先月号の多くの問いに対してご返事をいただいております。だからこそ、今月号は冒頭のような内容を書いたのです。ところが、まさに、この最後の編集後記を書く段階の今日(5月13日)のお昼過ぎに編集部長からの返事が届いたのです。間が悪いから、ありやしない。ご返事をいただいたのですから、それを掲載するのが本当だと思います。しかし、物理的な(この新聞はブッククラブの会員に本と一緒に送っている)時間が無いのです。多くの書いた今月号には、結果として内容に失礼な部分が生じました。が、今号はそのまま出して、次号に編集部長の回答を掲載させていただきます。合わせて多くの意見も掲載したいと思えます。どうぞお許しください。